

IIC 大会と ICOM 保存委員会大会に参加して

三浦定俊・西浦忠輝

1. はじめに

昨年(1984年)9月2～8日、パリ(フランス)で IIC(国際文化財保存学会)¹⁾の第10回大会が開催された。引き続き翌週の10～14日、コペンハーゲン(デンマーク)で ICOM(国際博物館学会)²⁾保存委員会の第7回大会が開かれた。IIC 大会は2年ごと、ICOM 保存委員会大会は3年ごとに開かれ、今年は、たまたま両方が同年に近接した場所で開かれるので、遠方からの参加者の便宜を図って、続けて開催するようにしたということである。筆者らはこの両方の大会に参加し発表を行なったので、その様子などを簡単に報告する³⁾。

2. IIC 大会

IIC 大会の今回のテーマは「Adhesives and Consolidants(接着剤と強化剤)」で、参加者は28か国から720名にのぼった。実際にはこれ以上の参加申し込みがあったそうだが、会場のパレ・ド・コングレ会議場の収容限度が720名なので、多くの参加希望者を断わらねばならなかったということである。参加者のほぼ三分の一は地元フランスからで、そのほかイギリス、アメリカなどからの参加者が多くを占めた。日本からの参加者は筆者らの他、奈良国立文化財研究所の沢田正昭氏、国立民族学博物館の森田恒之氏、絵画保存研究所の小谷野匡子氏で、全員が続く ICOM 保存委員会大会へも出席した。

大会に提出された論文数は47篇、数が多いので論文だけの参加もあれば、発表時間も内容に応じて10分から30分まであり、このほかポスターセッションにも多くの参加があった。発表された論文を主なテーマ別に分けると、接着剤の強度や劣化に関する問題を扱ったもの7篇、絵画・書籍・染織品の接着剤に関するもの7篇、遺跡・壁画・発掘品の強化に関するもの7篇、日本の表具に使用される古糊・膠・フノリなどに関するもの4篇(このうちの2篇が東京国立文化財研究所の増田勝彦氏および前記の森田恒之氏の投稿である)、木・象牙など有機物の処置に用いられる接着剤・強化剤に関するもの5篇、石に関するもの8篇、ガラスに関するもの6篇であった。この他、接着の基礎や接着剤そのものの分析など基礎的な問題を扱ったものが3篇あった。それぞれの内容について詳しくのべる余裕はないが、石やガラスの処置に関する論文の多くがシリコン系樹脂の優れていることをのべているのが目立った。

筆者らは、「Treatment of stone with synthetic resins for its protection against damage by freeze-thaw cycles(凍結融解劣化防止のための石の樹脂処置)」の演題で、樹脂処置による石の凍結融解による劣化防止についての実験研究の成果を発表した³⁾⁴⁾。本研究報告は、今回多くの参加者が触れたシリコン系樹脂と他の樹脂の凍結耐久性を比較して論じたものであったためか、予想以上に参加者の反響を呼び、多くの研究者から励ましの言葉を受けたことは光栄であった。

3. ICOM 保存委員会大会

ICOM 保存委員会大会は IIC 大会に続く9月10—14日にコペンハーゲンのモルトケ宮殿で

行なわれた。参加者は38か国、約550名であった。この大会は IIC 大会のようにひとつのテーマについて開催されたのではなく、それぞれ独立したテーマをもつ25の分科会に、会場と時間を分けて行なわれた。その内、筆者らの出席した第1分科会（新手法の応用）、第16分科会（コーティング）、第17分科会（館内気象と照明の調節）について簡単にふれる。

第1分科会は、プレプリントだけで25篇の報告があり、出席者数も全体の過半数を超え、2日間にわたって討議が行なわれた。パノラマX線透視撮影装置の開発、X線断層撮影装置の応用、ラッセル効果（写真フィルムが光以外の原因により感光すること）を利用した劣化の進行状況の判定、三浦の発表したガラス玉の屈折率の非破壊測定法などは「新手法」と呼べるものであろうが、残りのほとんどの報告は美術作品の科学的調査というケーススタディで、論文の数に比べて「新手法」というほど目新しいものがなかったのは残念であった。分科会最後の討議では、曖昧になったこの第1分科会の性格をはっきりさせるために、「日本絵画の技法の研究」を含め8つのサブグループに分けることが決められた。ICOM 保存委員会ではこのように分科会の変更や消滅、新設がしばしば行なわれ、前回に引き続き次回に同種の報告をだそうとしても、提出すべき当の分科会が消滅していることがよくある。

西浦は、第16分科会（コーティング）において、漆塗膜の物性試験（密着強度試験）結果についての発表を行なったが⁹⁾、近年漆についての関心が高まっている状況を反映してか、発表後多くの質問がよせられた。

第17分科会はプレプリントにのった報告は15篇だけだったが、それ以外にとびいりで多くの報告があり、討議が二日間にわたった。しかし、ここでも報告の多くはケーススタディであり、基礎的な報告、一般性のある実験報告があまりなかった。

ICOM 保存委員会大会も回を重ねるにつれ出席者がふえ盛会になってきたが、反面、提出された論文の程度がまちまちで議論がかみあわないという欠点も目立って来た。その一因は、誰でもが（たとえば大会に報告を提出するために ICOM の会員である必要はない）、内容は問われずに自由に報告を発表できるという ICOM 保存委員の運営方針にあると思われる。しかし、日頃なかなか外国の人々と研究内容について話し合う機会の少ないわれわれ日本側関係者にとっては、文化財保存に携わっている世界の人々が一堂に会した ICOM 保存委員会大会に参加できたことは、IIC 学会に参加したこととはまた違った意味で、大きな意義があったと思う。

4. お わ り に

IIC 大会においては、表具に用いられる古糊・膠・フノリなど日本の伝統的な接着剤に関する講演はまとめて、独立したセッションとして半日をさいて開かれた。表具・紙漉きなど日本の伝統的な文化財保存の技術に対して、近年、外国から強い関心が寄せられていることを考えると、今後も IIC 大会だけではなく、いろいろな形で日本の文化財に関する討議が行なわれるようになるだろうことを予想させる。先にのべたように ICOM 保存委員会では第1分科会（新手法の応用）のサブグループとして、「日本絵画の技法の研究」が設けられることになった。今回の両大会への日本からの5名という出席者数は、おそらく過去一番多い数であろうが、日本の文化財保存に対して諸外国からの関心が高まるなか、さらに多くの関係者の方々が出席、あるいは報告を出されることが望まれる。

最後に、IIC パリ大会の実質的な実行委員長をつとめたフランス歴史記念物研究所のステファナジ氏、今回の ICOM 保存委員会コペンハーゲン大会で向こう3年間の議長として選出さ

れたフランス博物館群研究所のラーニエ氏の両氏は、東京国立文化財研究所が毎年開催している国際シンポジウムに、以前招聘された研究者達である。その他、昨年日本に招待した IIC 会長のトムソン氏など、東京での国際シンポジウムを通じた多くの知己に出会い、わが国をきっかけにした研究の輪が少しずつではあるが広がっていきつつあるのを強く感じた。

参 考 文 献

- 1) 関野克：「文化財と建築史」鹿島出版会，52—64（1969）
- 2) 三浦定俊：“IIC 大会と ICOM 保存委員会大会出席報告” 日本文化財科学会会報 No. 6, 13—15（1985）
- 3) 福田正己，三浦定俊，西浦忠輝：“石造遺跡の凍結破壊と樹脂による防止効果の実験（第1報）”，保存科学22号，1—14（1983）
- 4) 福田正己，三浦定俊，西浦忠輝：“同上（第2報）”，保存科学23号，1—12（1984）
- 5) 西浦忠輝：“古建築の外装塗装の特性に関する実験的研究（第1報），漆塗膜の剝離強度（その1）”，保存科学23号，55—73（1984）

The 10 th IIC Congress & the 7 th Meeting of ICOM Committee for Conservation

Sadatoshi MIURA and Tadateru NISHIURA

The 10 th IIC Congress was held in Paris on 2-8 th of September, 1984 and the 7 th Meeting of ICOM Committee for Conservation followed it in Copenhagen in the next week (10—14 th). The authors attended the meetings and presented their papers. Some papers and discussions in the meetings are introduced.